

福井支部ニュース

2024年度 第3号

日本科学者会議福井支部

連絡先：山本雅彦、masahiko@mbp.nifty.com

郵便振込口座番号 00710-9-17967 日本科学者会議福井支部

支部ホームページ <https://jsafukui.net/>

科学者会議本部 <http://www.jsa.gr.jp/>

今号の内容

- ◆2024年度 JSA 福井支部 第2回幹事会の概要報告 (山根 清志)
- ◆報告「非行」「子どもの問題」を考える全国交流集会 (森 透)
- ◆時評 グレタ・トゥーンベリを報じなくなった大手マスコミ (小倉久和)

[報告] 2024年度 JSA 福井支部第2回幹事会の概要報告

2024年6月3日(月)の夕刻、オンライン方式により、標記の第2回幹事会が開催された。ほぼ定刻の18:00時から始まり、山本雅彦事務局長の司会のもと、前もって知らされていた議題(案)に沿って議事がすすめられた。

1、人事と役割分担について

まずは、5月11日の第1回幹事会で決まった人事と役割分担に関し、一覧表が示されて確認すべきを確認し、さらには前任者の退任の意思が固いか出来れば退任したいとのことで、空白になっている『福井の科学者』の編集長ポスト、支部ニュース担当(1人)の件で、時間をとって議論したが、成案を得るまでには至らなかった。

2、第39回原子力発電問題全国シンポジウム(略称：全国原発シンポ2024in 敦賀)について

5月30日(木)に、JSA 原子力問題研究委員会とJSA 福井支部幹事会とで持たれた「全国原発シンポ2024 敦賀」第1回実行委員会においての決定事項が、議題(案)Ver.1にもとづき示された。8月24日(土)~25日(日)の両日を開催日とし、24日午後に原発見学会、25日午前・午後にシンポ、会場と宿泊場所は敦賀市のニューサンピア敦賀(予約済み)等を確認した。なお、JSA 原子力問題研究委員会とJSA 福井支部幹事会との関係において、福井支部の関わり方は「主管」(作業はするが、お金は出せない)の関係でいくことになった。

3、全国第55回定期大会について

大会2日目は6月9日(日)にZoom開催で、福井支部からの代議員は小野一幹事であるが、JSA 会員であれば傍聴可能なことについてアナウンスがあった。

4、支部例会

島崎邦彦氏の件、樋口英明氏の件、大学問題等、未だ積み残しのテーマが残っているが、それ以外に追加すべき例会テーマはあるかの司会の質問に、一つには原発シンポの予行演習的な報告が考えられるのではないかとの声があった。

5、『福井の科学者』について

前編集長が欠席の中での議論であった。編集委員の一人から、何が大変なのかといえ、一つは毎号ごとの原稿集め、もう一つは集めた原稿をP.Cを使って編集することとのこと。これに対し、・幹事会の時ごとにこの件を話題にして話をすれば、原稿は集められるのではなかろうか、・集まった原稿をP.Cソフトを駆使して編集するテクニックを持った人が必要とされる件では、山本代表幹事と山本事務局長からできるだけ手伝いたいとの意思表示があった。1年に1~2号の『福井の科学者』を発行することが今後も維持できればと切に願うものである。

6、支部ニュースについて

5月11日の総会後、本日までに第2号が発行されることとなっている。原稿の集まり次第という面もあり、今後ともふるって原稿を寄せてい

ただくよう願いたい。

小野一幹事からは、[本の紹介とマスコミ時評]で小倉幹事が取り上げた青木美希著『なぜ日本は原発を止められないのか?』（文春新書）に関する文章を載せた支部ニュース第1号を小野幹事が青木氏に送ったところ、先方から小野氏宛に礼状が届いた旨、アナウンスがあった。

7、会計と会員拡大について

伊藤担当幹事から、口頭で現在の当支部における現金保有額について報告があり、余裕があるように見えるのは『福井の科学者』五十周年記念特大号の販売によるものと考えられるとのこと。支部の催し等に遠方から来る方々の交通費補助の支払いに充てたらどうかの意見が出た。

また、定年を機に6月限りで退会したいとのY氏の退会希望につき、その退会を異議無く承認した。

会員拡大については、議論は深まらなかった。

<以下は、議題(案)に表記されていた課題であるが、時間が切迫し、実質審議されなかった。重要な課題が含まれているので、広報事項として記載する。>

8、第25回総合学術研究集会——平和で豊かな地球を子や孫に伝えるために一市民として科学者として今、私たちにできることー

2024年11月23日(土)～12月8日(日) オンライン開催

9、その他(JSA全国事務局と県内連帯団体より)

(1) アルプス処理水の海洋放出はただちに中止を！院内集会(福島復興センター) 5月29日(水)13:00～16:00 参議院会館 B101 会議室

(2) 総がかりアクション 第104回実行委員会とスタンディング

①実行委員会 6月19日(水)14時～16時 福井市体育館 第3会議室

②スタンディング 6月19日(水)17時より18時まで

JR福井駅西ロライザップ前

③福井と敦賀の空襲を語り継ぐ展示とつどい第2回実行委員会

6月11日(火)13時30分～16時 県教育センター 303室

④県内縦断街宣行動計画 第1日目(嶺北ブロック)

日時:2024年6月15日(土)9時00分～16時30分

⑤県内縦断街宣行動計画 第2日目(丹南・嶺南ブロック)

日時:2024年6月23日(日)9時00分～15時50分

(3) 原水爆禁止2024年世界大会科学者集会

ビキニ被災70年から被爆80年へ

核兵器禁止条約への日本政府の参加を求めて

2024年7月27日(土)13:00～16:00

静岡大学静岡キャンパス内会場&オンライン ハイブリッド開催

(4) 任命拒否不開示裁判報道記事(東京新聞&しんぶん赤旗)

第1回口頭弁論に関するメディアの報道と米倉弁護士が記した「裁判長の被告に対する釈明」

参加幹事は9名、会議の終了は20時10分すぎであった。

(山根 清志)

支部ニュースへの寄稿・投稿を

支部ニュースを支部会員間の交流の場とするため、積極的な寄稿・投稿をお願いします。

◆ジャーナル評論:「日本の科学者」「福井の科学者」の評論

◆時事評論、意見・見解

◆活動報告・経験報告・事例紹介

◆行事案内、会員への案内・お知らせ

その他、エッセー、書評、文芸作品の紹介など、何でも支部ニュース担当者までメールでお送り下さい。yamane@f-edu.u-fukui.ac.jp

ogura@u-fukui.ac.jp

【報告】「非行」「子どもの問題」を考える全国交流集会に参加して

去る6月1日(土)10時から19時まで、長い一日でしたが、第24回の全国交流集会に妻と一緒に参加してきました。場所は、東京・新宿区の「新宿NPO協働推進センター」で、朝早く7時30分に家を出ました。JR山手線の高田馬場駅から徒歩15分のところに、NPOセンターがありました。隣は小学校だったと思いますが、このような所にしっかりしたNPOセンターがあるので感心しました。この全国集会は第24回目で、今までは柏市で毎年やっていましたが、コロナで久しぶりの集会でし

た。場所を新宿に移しての開催で、私は初めての参加でした。「非行」と向き合う親たちの会、という組織が全国に出来て、福井市にも今から20年ほど前に私も参加して「ふくい『非行』と向き合う親たちの会」（すいせんの会）が結成されましたが、会のメンバーのSさんは毎年、柏市で開催される全国集会に参加して、会のニュースに報告されていました。当日もSさんと会場で感動の御対面をすることができました。

第1部全体集会（10時～12時）のシンポジウム「何が立ち直る力となったの～当事者の声から学ぶ」は、セカンドチャンスの理事長の才門辰史さんとセカンドチャンスの皆さんの登壇でした。セカンドチャンスとは、少年院出身者の自助組織で、いろいろな事情で少年院や鑑別所に入った若者が出所して、自分と同じような若者のために自分でできることを考えていという組織です。会場の体育館の壇上に6名ほどの若者（男性4名、女性2名）が自分の歩みを語り、これから自分がやりたいこと、やらなければならないことを真剣に語ってくれました。理事長の才門さんが進行をされ、皆さんにいろいろと尋ねながら語りを引き出していました。そのあと、全国からこの集会に駆け付けてくれたセカンドチャンスの仲間の若者たちが壇上に登り、沖縄をはじめ全国各地からの応援のメッセージを届けてくれました。皆さん、明るくて元気なのが印象的でした。

第2部は分散会（13時～14時30分）、テーマ別分科会（14時45分～17時）でした。

分散会は、20名ほどのグループに分かれて、初対面の方が多いと思いますので、それぞれの自己紹介をしました。自分は何者なのか、なぜこの集会に参加したのかなどを自由に語り合いました。「非行」の子どもをもった母親が毎年この集会に参加して救われたということを涙ながらに語るのを聴いて胸が熱くなりました。この集会は、本当に大きな意味をもつ集いであることが深くわかりました。テーマ別分科会は、A 子ども・若者の生きづらさと家族、B 若者の「性」と性ビジネス、C さまざまな「依存」を考える、という3つでしたが、妻はA、私はBに参加しました。Bは若者を支援している「風テラス」・ソーシャルワーカーの橋本久美子さんのお話しがとてもリアルで深く考えさせられました。「風テラス」とはネット

検索ですぐに出てきますが、風俗で働く女性を支援する組織です。

最後の第3部は「梅原司平「愛と希望のコンサート」17時30分～19時でしたが、やはり期待通りの感動ステージでした。妻は梅原さんの大ファンで福井にいる時から一緒に全国のコンサートにできるだけ参加してきましたので、今回の全国集会の参加もこのコンサートが大きな参加理由でした（梅原司平についてはネット検索すればすぐ出てきます）。1時間30分の間、ずーと語りと歌が続き、80歳近い御年齢にもかかわらず、素晴らしい感動ステージでした。語りを聴いている観客の中には目頭を抑えながらお聴きになっている方もおられました。一日の疲れが梅原さんの語りですーとなくなっていく感じもしました。

帰りが遅くなりましたが、高田馬場駅の近くのラーメン屋でおいしいラーメンを食べて帰りました。「非行」「不登校」「いじめ」など、様々な社会問題が子ども・若者を取り巻いていますが、大人の私たちが何が出来るのかを考えさせられた一日でした。

（森 透）

2024年前期の会費納入をお願いします

2024年前期の会費納入をお願いします。過去の未納会費がある会員は、分割納入でも構いませんので至急納入下さい。

【マスコミ時評】グレタ・トゥーンベリを報じなくなった大手マスコミ「グリーンウォッシュ」と「ガザ・ジェノサイド」は同根

2023年度の支部ニュース6号の書評『資本主義は私たちをなぜ幸せにしないのか』（ナンシー・フレイザー、ちくま新書 2024/2）で、寄稿者の小野一氏が、次のように書いていたのが目についた。「遅々として進めぬ地球温暖化対策に抗議し、金曜日の授業をボイコットしてデモ行進するなどの行動を起こした十代のスウェーデン人環境活動家は、一躍時の人となった。だが忘れ去られるのも早かった。過激化し逮捕された元環境少女、なるお上品な論難は当たらない。反省すべきは、都合よく持ち上げておいて旗色が悪く

なるといとも簡単に見捨ててしまう大人社会の身勝手さ・不誠実さであり、時流に便乗した批判理論の底の浅さである。」本の著者はフェミニズム論者で、この著書ではトゥーンベリへの言及はない。

小野氏が書評で言及していた上記内容について、評者は余り知らなかったので気になり、ネットでいろいろ探してみた。環境原理主義のマスコット、左翼過激派にかぶれた元アイドル、気候変動問題から脱資本主義へ誘導、欧州各地で過激デモに参加、捕まって罰金刑、などなど、Google 検索に多数ヒットする。トゥーンベリは 2021 年の COP26 を「COP26 はグリーンウォッシュの祭典」と呼んでボイコットしたが、欧米のマスコミは「子どもたちを脱資本主義に誘うグレタさん」、「環境運動から共産主義に“転向”して、COP から追放されたグレタ・トゥーンベリ」などと批判されている。日本のマスコミは、紙面ではあまり報じていないようだ。

トゥーンベリが「デビュー」した時は 15 歳だったから、もう 20 歳を越えているのに「アイドル」とは女性蔑視であるし、そもそも「SDGs マスコット」「アイドル」として持ち上げたのは、日本を含む欧米先進国の大手マスコミやジャーナリストだったのだ。ところが、たとえば CO₂ 排出権取引（この中には水素ガス・アンモニアガスを資金援助で途上国で作って先進国で消費するということもある）など、「グリーンウォッシュ」と言うべき状態が先進諸国での主流になりつつある中で、彼女が世界に警鐘を鳴らし批判的立場を鮮明にしたため、煙たがられたのではないか。そして左翼的とか脱資本主義とかのレッテルを貼ってきた結果ではないか。

SDGs には、陸海空の地球環境の保護とともに、質の高い教育、貧困・飢餓の克服、清潔な水やトイレの確保、全ての人・国の平等など、17 の目標が設定されている。ガザをはじめ世界の戦争は、極めて深刻な環境汚染と破壊をもたらすと同時に、人権にかかわる多くの目標を破壊する。昨年 11 月のアムステルダムでの地球温暖化対策を求める集会で、彼女は講演でイスラエル批判とパレスチナ支持を訴えたら、「私は環境運動のデモに来たのだ、政治発言を聞きに来たのではない」と参加者に抗議されマイクを奪われた。欧米の大手マスコミやネットのサイトでは「反イスラエル」は「反ユダヤ」だと主張、イスラエルの軍報道官が「彼女と連帯する人はテ

ロの同調者だ」と反発、ドイツの週刊誌シュピーゲルは最新号の表紙にトゥーンベリを載せ、タイトルを「アイドルの誤った道」とした。なお、彼女が「すでに（原発が）稼働しているのであれば、それを停止して石炭に変えるのは間違いだと思う」と発言したことで原発推進派が脱炭素のお墨付きと得たと喜んだというが、彼女のこれまでの言動から判断すれば、我田引水であろう。つい先日読んだ『**自壊する欧米 ―ガザ危機が問うダブルスタンダード―**』（内藤正典・三牧聖子著 集英社新書 2024/4、小野氏がこの本の書評も支部ニュース今年度第 1 号に寄稿）に、トゥーンベリを巡るこのような事件がいくつか言及されている（p.p.149～151）。

ところで、宮田律著『**アメリカのイスラーム観 変わるイスラエル支持路線**』（平凡社新書 2024/1）からは、現在のガザを巡る米国の対アラブ・イスラーム感と歴史を知ることができた。この視点は日本のマスコミにはほぼない。米国ではトランプやバイデンをはじめイスラーム嫌いが多いが、建国時から欧州の白人や奴隷たちによって中東・アラブからイスラームの文化が持ち込まれ、ジャズやブルース、あるいは建築様式など、米国の文化的基礎の 1 つとなっているようだ。9.11 の標的になった世界貿易センタービルは、日系 2 世のヤマサキの設計でイスラームの建築様式を採り入れていたようだ（pp.211～213）。ところで、相対性理論のアインシュタインはユダヤ人でナチスドイツから逃れて米国に来たが、「建国」されたイスラエルには戻らなかった。イスラエルの建国に尽力していたシェパード・リフキン宛の 1948 年 4 月の手紙で「本当の、最終的な大きな破滅がパレスチナでユダヤ人に降りかかった場合、その最初の責任はイギリスにあり、二番目の責任は私たちユダヤ人の中から生まれたテロ組織にあります。私はこれらの誤った犯罪者とかかわる人たちと会う気は有りません。」（pp. 85～86）と書き送ったという。学生時代だけだが物理の学徒だった筆者の尊敬する先人の、75 年後の今日を見通した言葉に頭が下がる。

（小倉 久和）

＜＜編集後記＞＞

2024 年度支部ニュース第 3 号をお届けします。

会員各位の支部ニュースへの、積極的な寄稿をお願いします。（OG）